コメント1

後藤 絵美　東京大学

本日は充実した時間を過ごさせていただきました。ありがとうございました。いずれの報告もたいへん興味深く拝聴しました。簡単に感じたことと、質問を述べたいと思います。

先行研究におけるパルダ概念解釈の根拠とその変容 ── 賀川報告について

まず賀川さんのご報告ですが、ヴェールをまとったり脱いだりするという実践が、状況に応じて刻々と変化しつつ起こりうるという事例で、「ヴェールは一度着たらやたらと脱げないもの」という意識の強い中東研究者も多い中、いろいろな示唆に富んでいたと思います。

確認としてうかがいたいのが、先行研究に関わる部分です。パルダ概念とは「男女の分離」や「女性隔離」だと一般に言われていて、研究書でもそのように書かれているとおっしゃっていたと思いますが、それがたとえばイスラーム法学上の位置づけとは異なっているとすれば、それらの研究や意識はいったいどこから来たのか、何を根拠にパルダ概念はそのように理解されてきたのかを教えていただきたいです。

また、賀川さんの調査の結果でわかったことについては、「なるほど」と思ったのですが、2017年、2018年の調査で見たことなので、その時点での一つの結果である、ということかと思います。パルダ概念について、「この時点でこういうものが見えました」ということがわかったとしたら、それはいつ頃から、どのようなかたちで変化してきたのか（あるいは変化してこなかったのか）という時間軸の話についても、今後の課題かもしれませんが、わかることがあれば教えていただきたいです。

トルクメニスタンの服装統一のプロセスとは ── 岡田報告について

岡田さんの発表については、トルクメニスタンの位置も人口もGDPも初めて聞いた者としては、何もかもが興味深いというところでした。とくに、独立に際して国家の統一、文化の統一を目指して制服というかたちで服装規定が入ったという点がおもしろいと感じました。実は私が以前調べたサウジアラビアも似たようなことがありました。同国では、各地方に固有の伝統服があり、男性も女性も地域によって随分異なる形状の装いをしていたのですが、1932年の独立後、初代国王のアブドゥルアズィーズが、国民意識の統合を促そうと── まさに同じような話ですが、公務員の男性の衣服をナジュド地方の伝統服で統一しました。結果として、他の伝統服は廃れて、現在私たちがサウジアラビアについてイメージする、長い白いシャツであるトーブ、黒やベージュの外套であるムシュラフ、格子柄や白のグトラやシュマーグと呼ばれる被り物、それから黒いロープであるイガールというものが統一して、サウジアラビアの服だということに決まったというのです。

女性に関しても同じで、もともと地方固有の色柄があるかぶり物があったのですが、全体に黒く、全身を覆うアバーヤというものに統一されました。これはある地方のものというよりは、ワッハーブ派などにより宗教的な規範が強まったことで統一されたと私は勉強したことがあります。

二つの事例を合わせつつよくよく考えてみる中で、このような規定の実践はどうやって進んでいったのだろうかという疑問を持ちました。岡田さんにうかがいたいのは、服装に関する統一は、トルクメニスタンにおいて、どのようなプロセスを辿ったのかということです。調査がしにくい、資料を入手することがなかなか難しいかと思いますが、何か手がかりとなるような情報があれば教えていただきたいと思いました。

キモノはいかに周辺国との関係性をつないだのか ── 森報告について

最後に、森さんのお話についてです。今回の企画の前文にあるように、私たちは「装いは価値観や信念、思想、規範などの目には見えないものを映し出す鏡である。その時々のファッションを見ることで、それぞれの時代の人がどのような美意識を持ち、何を大

切にしていたのか。どのような枠組みのなかで生きてきたのかを知ることができる」と捉えていて、こうした内容について考えたいと思いつつ取り組んでいます。

そこで本日、森さんのお話を聞いてハッと気づきました。現代の私たちが持っている価値観や信念、あるいは思想、規範というものがある。たとえばキモノなどは日本人にとっては国民服であり、伝統服であるということが、おそらく私たちの頭の中に確固たるイメージとして埋め込まれています。そして別の文脈でそれが使われている場面を見たときにも、ついつい同じ価値観や規範を読み込んでしまうのです。

たとえば、森さんの報告で見せていただいた台湾の現地の人たちの写真を見ても、日本の価値観や規範を押しつけられているのだ、「着せられて写されたでしょう」みたいなことをついつい思ってしまうのではないかと思います。しかし、私たちの現在の価値観や思想が当時本当に共有されていたのかどうかについては、常に疑問に持たなければいけないということがわかりました。ありがとうございました。

その意味で、東南アジアのからゆきさんの事例などは、書いた本人も「なぜ」と思ったんですよね。「なぜキモノ着ちゃいけないの」と思ったわけです。同じ空間にいながらも違う規範が読み込まれていて、それぞれの文脈がとても大切だということがよくわかりました。

森さんなら大丈夫だと考えて、少し答えにくそうな質問をさせていただきます。キモノというものがいくつかの空間で出てくる話を教えていただいたわけですが、キモノを通した関係性というものがもしあるとすれば、どのような関係性が読み取れるのでしょうか。つまり、私が最初に何も考えずに思ったように「日本の象徴としてのキモノを押し付けられた」という関係性ではないとして、さまざまな意味が浮かび上がってくると思います。森さんがこれまで研究を進められたなかで、キモノというものが近代日本の国家主義・帝国主義のなかで周辺国をどのようにつないできたのかについて、何か思うところがあれば、感触を教えていただけたらと思います。